

水がめを水でいっぱい

ヨハネの福音書 2章 1-12節

はじめに

毎月第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話しています。今日の聖書箇所には、「ガリラヤのカナ」で行なわれた結婚式での出来事が書かれています。ここでイエス様が、「最初のしるし」として「水」を「ぶどう酒」に変える奇跡を行われるのです。

1. カナの婚礼

まず 1-2 節を見てみましょう。「それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があり、そこにイエスの母がいた。イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれていた」。「ガリラヤのカナ」は、ナタナエルという弟子の出身地です（ヨハネ 20：2）。そこで結婚式があり、イエス様と弟子たちが招かれたというのです。ただその結婚式には、「イエスの母」がいたというのです。イエス様の母というのは、もちろん「マリア」のことですが、ヨハネの福音書では、「マリア」という名前ではなく、いつも「イエスの母」と書かれているのです。

この結婚式は、一体、誰の結婚式でしょうか。少なくとも分かることは、イエス様の母マリア、イエス様、そして弟子たちに共通する知り合いの結婚式だということです。二世紀頃からの伝説では、この結婚式は、「ヨハネの福音書」を書いたゼバダイの子ヨハネの結婚式だと言われています。というのは、福音書全体を見ると、ゼバダイの子ヨハネの母は、「サロメ」(マルコ 15:40、16:1、マタイ 27:56)という人ですが、そのサロメは、イエス様の母マリアの姉妹（ヨハネ 19：25）と考えられます。そう考えれば、ゼバダイの子ヨハネとイエス様は、「従弟（いとこ）」関係にある親族ということになります。そうであるならば、叔母であるイエス様の母マリアも従弟のイエス様も結婚式に招かれるのは自然なことです。またこの時、ゼバダイの子ヨハネは、すでにイエス様の弟子となっていましたから、仲間である他の弟子たちも結婚式に招かれるのも頷けます。この「カナの結婚式」の出来事は、「ヨハネの福音書」にしか出てきません。ですから、ゼバダイの子ヨハネが、自分の結婚式でイエス様が行ってくださった驚くべき奇跡を、喜びをもってこの福音書に書いたのかもしれませんが、しかし、これはあくまでも伝説なので、確かなことは分かりません。確かなことは、この結婚式は、イエス様の母マリアとイエス様、そして弟子たちの共通の知り合いの結婚式であるということです。

2. 母とイエス

しかし、この結婚式で困ったことが起こります。結婚式の参列者に振舞うぶどう酒が足りなくなってしまったのです。当時の結婚式は、一日ではなく一週間も行われていたよう

で、その一週間の間、皆で食べたり飲んだりして、華やかに祝われたそうです。ですから、ぶどう酒も一週間分の量が必要だったのです。ユダヤ人の諺に「ぶどう酒がなければ、喜びなし」という言葉があるそうですが、結婚式の途中で、ぶどう酒がなくなれば、結婚式も台無しになってしまいます。そこで、母マリアが、ぶどう酒が足りないことにいち早く気がついて、イエス様に相談するのです。3-4節を見てみましょう。「**ぶどう酒がなくなると、母はイエスに向かって、『ぶどう酒がありません』と言った。すると、イエスは母に言われた。『女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません』。**

マリアは、ぶどう酒が足りなくなることを気にするぐらいですから、やはり単なる招待客ではなく、むしろもてなす側、主催者というか親族側の立場にあるような気がします。マリアはこの困り事を、イエス様に相談します。するとイエス様は、「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません」と言うのです。親子の会話としては、とても変な会話です。ヨハネの福音書の中で、イエス様が母マリアを呼ぶ時は、いつも「女の方」と呼びます（ヨハネ 19：26）。イエス様は決して、マリアを「お母さん」とは呼ばないのです。「あなたはわたしと何の関係がありますか」というのも、母親に対する言葉としてはとても冷たい言葉です。思春期の中高生の男の子が恥ずかしさのゆえに母親にこのように言うなら理解できます。しかしイエス様はこの時すでに三十歳です（ルカ 3：23）。「あなたの父と母を敬え」と言われた神様のひとり子であるイエス様の言葉としては、理解し難いものがあります。しかもイエス様は、「わたしの時はまだ来ていません」と言っていますから、ぶどう酒が足りないというマリアの相談に対して、自分は今あなたを助ける時ではないと言っているように聞こえます。全体的に4節のイエス様の言葉は、冷たく否定的な言葉のように聞こえます。

3. 最初のしるし

では、イエス様はマリアの相談を、自分とは関係ないと言って無視するのでしょうか。そうではないようです。5-10節を見てみましょう。「**母は給仕の者たちに言った。『あの方が言われることは、何でもしてください。』そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめが六つ置いてあった。それぞれ、二あるいは三メトレテス入りのものであった。イエスは給仕の者たちに言われた。『水がめを水でいっぱいにしなさい。』彼らは水がめを縁までいっぱいにした。イエスは彼らに言われた。『さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところに行って行きなさい。』彼らは持って行った。宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。それで花婿を呼んで、こう言った。『みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったところに悪いものを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました』。**

マリアは、給仕の者たちに、イエス様が言われることは何でもしてくださいと言っていますから、イエス様に助けを断られたとは思っていないようです。イエス様も、給仕の者たちに、「水がめを水でいっぱいにしなさい」と言って、水をぶどう酒に変えられて、マ

リアの相談にちゃんと答えておられるのです。

ではイエス様の「わたしの時はまだ来ていません」という言葉は、どういう意味なのでしょう。「ヨハネの福音書」の中で、イエス様が「わたしの時」というのは、「十字架で死なれる時」を意味します。13：1には、こうあります。「**過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた**」。「イエス様の時」というのは、「十字架の時」です。確かに、カナの結婚式の時は、まだイエス様の「十字架の時」ではありませんでした。この時、イエス様はまだ宣教を始めたばかりでした。その意味では確かに、「イエス様の時」ではなかったのです。

ではなぜイエス様は突然、「わたしの時はまだ来ていません」と言われたのでしょうか。マリアはただ「ぶどう酒がありません」と言うだけです。実は、このカナの結婚式で行なわれた水をぶどう酒に変えるという奇跡は、イエス様の十字架と関係のある出来事なのです。11節を見ると、「**イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた**」とあります。このカナの結婚式の奇跡は、「最初のしるし」と言われています。これは単なる「最初の奇跡」という意味ではありません。イエス様は1章でも、ナタナエルがいちじくの木の下にいるのを、ピリポがナタナエルを呼ぶ前に見ていたという超自然的な奇跡を、弟子たちに見せていたからです。ですから「最初のしるし」というのは、「最初の奇跡」とは別の意味のことなのです。では、「最初のしるし」とは何のことでしょうか。それは、イエス様の十字架を示す「最初のしるし」という意味です。イエス様はすでに、このカナの結婚式で、これからご自分が十字架で死なれることを示しておられたのです。

では、水をぶどう酒に変えるという奇跡が、どのような意味で十字架の死を示しているのでしょうか。イエス様がぶどう酒に変えられた水は、ただの水ではなく、6節にあるように、「ユダヤ人のきよめのしきたり」に用いられた水でした。ユダヤ人は、食事をする前には、きよめの水で手と食器をきよめてから食事をしました。また市場で買い物をして戻ってきた時には、きよめの水でからだ全身をきよめてから食事をしました。このようにユダヤ人には、食事の前には、きよめの水で、手や食器、時にはからだ全身をきよめてから食事をするという「しきたり」があって、ユダヤ人はそれを堅く守っていたのです。カナの結婚式には、二あるいは三メートル入りの水がめが六つも置いてありました。一メートルが40ℓと欄外に書かれていますから、カナの結婚式には、500ℓ～700ℓのきよめの水が置いてあったのです。一週間にわたって、参列者が手やからだをきよめたり、食器をきよめたりするために必要だったのでしょう。

しかしイエス様はある時、からだの外側だけをきよめようとするユダヤ人に対して、からだの内側のきよめを強調されました。なぜなら、本当に汚れているのは、私たちの外側にあるのではなく、私たちの内側にあるからです。イエス様はこう言われました。「**人から出て来るもの、それが人を汚すのです。内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出てきます。淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、**

これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです」(マルコ 7:20-23)。私たちの外側、目に見えるからだは、水で洗うことできよめることができます。しかし、私たちの内側、目に見えない心は、どんなに水で洗ってもきよめることができないのです。どんなに多くの水を飲んでも、心は良くなりません。私たちの悪い考え、人を妬んだり、見下したり、ののしったりする、私たちの心は水では良くなりません。私たちの自己中心の性質、聖書で言う「罪」は、水ではきよめることができないのです。

イエス様は、水をぶどう酒に変えられるのです。ぶどう酒は、イエス様が十字架で流された血を表します。そしてイエス様が十字架で流された血こそ、私たちの罪をきよめるのです。Ⅰヨハネ 1:7に、「**御子イエスの血がすべての罪から私たちにきよめてくださいます**」とあります。またヘブル 9章には、「**キリストが傷のないご自分の血を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にするのでしょうか**」(ヘブル 9:14)「**血を流すことがなければ、罪の赦しはありません**」(ヘブル 9:22)とあります。イエス様が十字架で流された血こそ、私たちの罪をきよめ、罪の赦しを与え、私たちを神様に仕える者へと変えていくのです。

水では、私たちの心は、私たちの心の中にこびり付いている自己中心という罪は、解決しないのです。神のひとり子の尊い血が流されなければ、解決しないのです。イエス様が、カナの結婚式で水をぶどう酒に変えられた奇跡は、水で人の外側しかきよめられなかった時代から、イエス様の十字架の血で人の内側を、人の心を、人の罪をきよめる時代が来ることを表しているのです。このイエス様の十字架の死を指し示す「最初のしるし」こそが、カナの結婚式での奇跡であったのです。

おわりに

母マリアは、「ぶどう酒がありません」と言いました。私たちには、「ぶどう酒」が必要なのです。私たちの心をきよめる、私たちの心にこびり付いている自己中心という罪を、洗い流し、きよめる「ぶどう酒」が必要なのです。私たち人間は、私たちの外側をきよめるものを作り出すことはできます。私たちのからだを清潔に保つ商品、私たちのからだを美しくする化粧品、私たちのからだを美しく、格好よく着飾るファッションをいくらでも作り出すことはできます。その文化の発展は著しいものがあります。しかし私たちの内側、心を美しくするもの、私たちの自己中心という罪を洗い流し、きよめるものはどうでしょうか。それは、何世紀経っても、私たち人間は作り出すことはできません。どんなに文化が発展しても、犯罪はなくなりません。人々の不安はなくなりません。人々の争いはなくなりません。私の自己中心という性質は、ちっとも良くなりません。私たち人間には、水ではなくぶどう酒が必要なのです。私たちの心をきよめ、私たちの心を変え、私たちに喜びを与えるぶどう酒が必要なのです。

私たちは今週、受難週を過ごします。水をぶどう酒に変えられ、十字架で血を流し、私たちの心をきよめるぶどう酒を与えてくださるイエス様を心に刻んで過ごしましょう。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの心は、自己中心という罪の性質がこびり付いて拭い切れません。私たちの外側、目に見えるからだをいくら奇麗に格好よく整えても、私たちの内側、目に見えない心は依然として汚れたままです。しかしイエス様の十字架の血は、私たちの罪を洗い清めてくださいます。少なくとも神様の御前では、今、私たちの心は雪よりも白くされています。しかし私たちの罪が完全に洗い清められるのは、天の御国へ旅立つ時、またイエス様がこの地上に再び来られる時を待たなければなりません。どうかその日まで、御言葉と聖霊によって、そしてイエス様の十字架の血によって、私たちの罪をきよめてください。そして罪から離れ、生ける神様に真実に仕える者としてください。

この祈りを私たちの罪のために十字架で血を流されたイエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。